

立教大学学術推進特別重点資金 (立教SFR)

大学院学生研究

2019年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 異文化コミュニケーション研究科			異文化コミュニケーション	専攻
研究代表者 (2020年3月現在のものを記入)	在籍課程・学年・学生番号		氏名		
	<input type="checkbox"/> 博士前期課程 年 <input checked="" type="checkbox"/> 博士後期課程 2年 (学生番号: 18WV002K)		中野 悠稀 印		
指導教員	所属部局・職		氏名		
	異文化コミュニケーション学部・教授		森 聡美 印		
自然・人文・社会の別	自然 ・ 人文 ・ 社会		個人・共同の別	個人 ・ 共同 名	
研究課題	Anaphora resolution in Japanese-English bilingual adults				
研究組織 (研究代表者・共同研究者) ※2020年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年		氏名		
	異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション 専攻 博士後期課程 2年		中野 悠稀		
研究期間	2019 年度				
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 179,387 円 / (採択金額) 190,000 円				

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

バイリンガルは日本語のような脱落主語言語での前方照応の解釈や産出において、談話・語用的に不要な場面で明示主語を過剰に容認・産出する傾向があることが示されている。このような傾向はこれまで主に言語知識と言語処理の方面からそれぞれ検討されてきた。言語知識アプローチでは、バイリンガルにおける明示主語の過剰容認・産出は、二言語の知識が言語間で影響しているからであると説明される一方、言語処理アプローチでは、前方照応の処理に加えて二言語を制御する必要性から生じる認知的負荷に起因すると考えられている。本研究では、上記二つの説明のうちどちらがより当該の現象を説明できるのかについて、複数種類の課題(オンライン理解[認知負荷の有無]、オフライン理解、ナラティブ産出、事後インタビュー)を用い、バイリンガルの言語習得・使用に関わる諸変数を考慮した上で群間または群内比較分析を通して検討する。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[バイリンガリズム] [前方照応] [言語処理]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

2020年度は、主に実験全体の手順の確定や各課題で使用する材料や機器の準備を行い、予備調査の実施を重ねて必要に応じて修正を施し、本調査に向けて調整を行なってきた。また、本調査のための被験者募集を実施し、順次データ収集を開始した。全体的に年度開始時に計画した予定通りに進み、目標は概ね達成されたと考える。

実験課題の手順については、予備調査を通して実験全体と各課題に要する時間を確認するとともに、各課題を実施する順番に関してもカウンターバランスや被験者側の疲労、倦怠の点から検討を行なった。また、先行研究を参考に作成した刺激文を予備調査として数人に回答してもらい、問題点を改善して本実験に備えた。事後インタビューについては、主に第二言語習得研究領域の先行研究を参考にし、インタビュー全体の構造や質問項目について検討を行なった。使用機器の準備に関しては、まず心理学実験設計ソフトウェア (PsychoPy) を使い、オンライン課題 (認知負荷有り・無し) として行う自己ペース読み課題を作成した。作成した課題は試行を通して動作確認を行い、また必要なデータが取れているかを確認した。次に、ワーキングメモリ容量を測定するための数唱課題については、順唱、逆唱それぞれに用いるための数列を読み上げる日本語音声を作成した。

本調査のための被験者募集は1月上旬から中旬にかけて本格的に実施し、1月下旬から3月上旬にかけてデータ収集を行った。現段階では、バイリンガル3人、モノリンガル6人のデータ収集が終了している。

次年度は、分析の下準備として得られたデータに加工やコーディングを施すとともに、現在も実施しているデータ収集を継続していく。また、得られた結果に基づき論文を執筆し、国内外の査読付き学術雑誌に提出し受理されることを目指す。また、研究会や学会での発表を通して得られるフィードバックを糧にして現在も進行中である博士論文の執筆を進め、次年度内に予備論文提出を目指す。

研究成果の概要 つづき

※この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①~④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて提出してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

1. ○Nakano, Y. (2019). Immediate input quality may not be transferrable: Cross-linguistic influence on subject realization in a simultaneous Japanese-English bilingual child, *Studies in Language Science: Journal of the Japanese Society for Science* 18, 67-98.

②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)

なし

③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)

なし

④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

【口頭発表】

2. ○中野悠稀 「日英成人バイリンガルにおける前方照応の解釈—言語学、言語処理アプローチに基づくバイリンガル固有の言語行動の検証—」『第1言語としてのバイリンガリズム研究会—第20回研究会』、口頭発表、立教大学、2019年10月
3. ○Nakano, Y. & Mishina-Mori, S. (2019, August). An examination of the effect of input frequency on subject realization in Japanese-English bilingual children. Paper session presented at the meeting of International Symposium on Monolingual and Bilingual Speech. Chania, Greece.
4. Mishina-Mori, S., ○Nakano, Y. & Yujobo, J. Y. (2019, August). Conceptual transfer in connecting events in Japanese-English bilingual teenagers' narratives. Paper session presented at the meeting of International Symposium on Monolingual and Bilingual Speech. Chania, Greece.

【ポスター発表】

5. ○Nakano, Y. (2019, July). Offline Interpretation of Japanese Pronominal Subjects in Japanese-English Bilingual Adults. Poster session presented at the The Japanese Society for Language Sciences 21st Annual International Conference. Tohoku University, Japan.
6. Mishina-Mori, S., ○Nakano, Y. & Yujobo, J. Y. (2019, June). Referent re-introduction in bilingual narratives: Is it more vulnerable to cross-linguistic influence? Poster session presented at the meeting of International Symposium on Bilingualism. University of Alberta, Canada.